

長畝ふるさと通信

【2021年1月号】

■ 自由は不自由？

コメの消費量は人口減少や高齢化等によりここ数年、毎年10万トンずつ減少してきましたが、令和2年はコロナの影響で年間20万トンも減少したそうです。コメの代わりに10万トンも食べるものがあったということで、一体国民は何を食べていたのだろうか……。令和1年産米の在庫が山ほどあり、そこへ2年産が思ったほど作付面積の減少が進まなかったようで、現在、コメ業界では大変な過剰在庫を抱えているそうです。平成30年から国によるコメの生産調整が廃止され、生産者に「作る自由」「売る自由」が突然与えられた結果、生産調整機能が曖昧になり、需給バランスが保てなくなってしまいました。国はまるで他人事のように、「令和3年産米の主食用米については全国で過去最大規模の6700ha(生産量換算で36万トン)の作付け転換が必要よ」とおっしゃり、「でもコメの作付は生産者や団体の経営判断でおやりなさい」と言います。つまり、「コロナもあってコメがムチャクチャ余ってるから、これ以上在庫を抱えて価格を下げたくなかったら、私の言う通りに作るのをおやめなさいな、それでも作るならあとはどうなっても知りませんよ、自己責任ってことで……」ということでしょう。これ以上コロナ感染を防ぎたいければ「飲食店にはお金をあげるから(充



分じゃないけど)営業自粛しなさい、あとは国民一人一人の自覚の問題よ、だって自由を束縛できないんだから」という理屈と一緒にような気がするのボクだけか……。自由が保障されるのが民主主義だけど、それと引き換えに国の責任を放棄してはいけません。国民の健康や食糧を守るのが国の大きな役割なのに、どこかずれている感じがしてなりません。

佐渡の今年の減反率は31.59%で昨年の32.92%から更に緩和されました。「お上に逆らって主食用米の作付面積を拡大して、佐渡米をもっと売っていこう」という覚悟の現われかと思いきや、現実はもっと悲しい。いくら作付面積を増やしても、それ以上に高齢化や後継者の問題でコメづくりをやめてしまう生産者が多く、結果としてJAの計画販売量が確保できないのです。自由に作って自由に売れる仕組みになったはずなのに、どこか不自由を感じてしまいます。コメの主産地では生産調整が守られず過剰作付けとなってしまう、最終的には全国的なコメ余り現象が起きています。経済の論理だけでは農地は守れないと思っていますが、国の考えは違うようです。

朝の来ない夜はない、凍った草木もいつかは溶けて春には花を咲かせます。元の暮らしには戻れなくても、明るい未来を目指しましょう(何だか変な宗教っぽいですが?)。

■ とうらやさんで無病息災・五穀豊穡 そしてコロナの終息も・・・



佐渡では昔から1月の小正月に近所で集まって「とうらやさん(どんでん焼きとも言います)」をしています。最近では日曜日じゃないと集まらない都合もあって、今年は17日に行いました。近所とはいっても6件しかないのでこじんまりとやるんですけど・・・。竹でやぐらを組んで火を燃やします。火が大きくなると竹が「パーン、パーン」と大きな音を立てて暴発します。そこへ神棚に祀ってあった松飾やお守りなどを燃やし、無病

息災・五穀豊穡を神様にお願いします。子供の頃は書初めの習字を燃やして、空高く舞い上がると字がうまくなるなんて言われていましたが、今では年寄りばかり。もっぱらの話題は「〇〇爺さんはまだ生きとるか」「〇〇婆さんは100歳直前でこの前亡くなった」とか、集落内の生存・健康情報の収集場所となっています。粗方、竹が燃え尽きて「熾火」になると持ち寄ったモチやスルメ、サツマイモなどを焼きながら酒を飲みます。雪がちらつく極寒の中で飲む冷たいビールがまた美味しい。話題の中心になるまで頑張って続けていきたいと思います。



■ 恋の季節

1月中旬になるとトキは繁殖期になり、首周りから剥がれ落ちる黒い物質を水浴び後に自分の体に擦りつけ、頭から背中にかけて羽が灰色の「生殖羽」になります。トキにとっては「恋の季節」です。彼らは緊急事態宣言などどこ吹く風で、田んぼへ出かけては好みのお相手を探しています。最近の人間界ではマッチングアプリとかで恋人を見つけるそうですが、トキの方が人間らしく思えてきます。昨年12月末現在の野生下のトキは442羽だそうで、環境省では今年もペアリング数を



昨年並みに120組ほど見込んでいるそうです。左の絵は今年の田んぼアートのデザイン画です。タイトルは「佐渡に生きる」だそうで、人間とトキの共生を表現したとか・・・。人間界との共生はそう簡単ではないよ、

コロナ君・・・